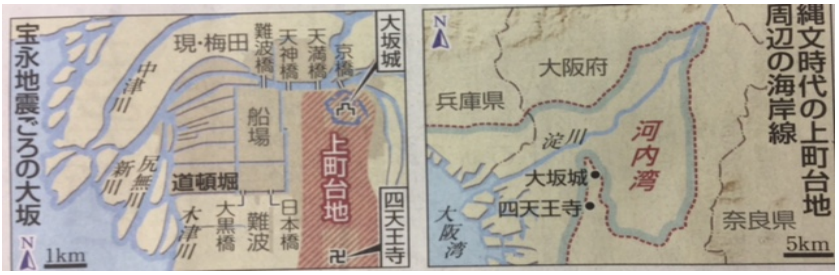
近世の開発が大惨事招く―大阪

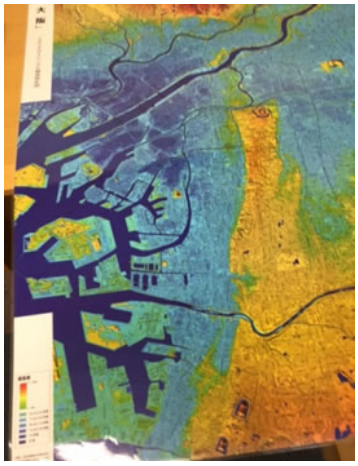
大阪の「災害脆弱性」を考えるうえで、中日新聞 8 月 27 日の寒川旭「地震史話 5」を紹介したい。写真下は大阪市立中央図書館で撮った「2 万 5 千分の 1 デジタル標高地形図」による。名古屋との比較も興味深い。

1707 年 10 月 28 日（宝永 4 年 10 月 4 日）、南海トラフのほぼ全域から発生したのが「宝永地震」だ。筆まめだった尾張藩士朝日文左衛門重章の日記『鸚鵡籠中記』には、発生から約 2 時間後に大坂を襲った津波について、次のように書く。

“四百石から千石の名古屋船・江戸舟が，津波で壊されて多くの積み荷を失った。数百槽が、津波と一緒に（水路をさかのぼって）道頓堀の芝居町や日本橋の下まで押し寄せ、日本橋より西の橋はすべて壊された。（運悪く）地震を恐れて、皆が金銀財宝を携えて船に乗り込んだところに津波が襲いかかり、大船の下敷きになった小舟の中で、誰もが溺れ死んだ。（要約）”確かに、水に浮かぶ船にいると地震の揺れは小さい。だが、縦横に張り巡らされた水路に沿って津波が押し寄せるとは、夢にも思わなかっただろう。道頓堀は現在の大阪・ミナミの繁華街を東西に横切る。掘の南側には大量の泥水が流れ出し、難波の町並みを水没させた。市中の被害は圧死 3630 人、津波による溺死 1 万 2 千百人余（『鸚鵡籠中記』）と甚大だった。



大阪平野の真ん中で北にのびる「上町台地」。縄文時代には三方を海で囲まれていた。西側が大阪湾、台地の北側から回り込み東に大きく広がったのが河内湾である。その後、海の範囲は小さくなったが、四天王寺や大坂城など重要な建物は、小高く地盤の良い上町台地に建てられた。豊臣秀吉は晩年、台地の町人たちを西側に広がる低湿地の一部（船場の北部）に移住させた。江戸時代になると周辺の開発が進み、西横堀・長堀・道頓堀などの水路が掘削され、「水の都」として大発展した。



このように、海に向かって市街地が拡大し、人口が急増したところを襲ったのが宝永地震である。地盤が軟弱なため多くの建物が崩れ、津波が多くの命を奪った。近世の開発が大惨事を招いたことになる。江戸時代に入って小高い台地に建設された名古屋城下町とは対照的だ。地震は同じように繰り返す物理的現象だが、地震の被害は、その時代の暮らしぶりを反映している。

（2015年9月3日）